
毎日三枚小説『虹』

藍田いずる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毎日三枚小説『虹』

【Nコード】

N7757I

【作者名】

藍田いずる

【あらすじ】

サラリーマンの話です。

家に帰る車の中で僕は虹を見た。長野方面に広がる長い山脈に虹がかかっていた。久しぶりだなあと僕は思って運転しながらじつと虹を見ていた。虹はどこから始まって、どこで終わりを迎えるのか僕は知らない。

世の中には知らない事の方が多くて、それは社会に出てからというものほとんど知らないものが拡大していつている感覚があった。

仕事は医薬品の営業職でPOPや陳列の手伝いをする事が多い。よく見る女性店員はみんな薬剤師と結婚する事を夢見ているので、とてもじゃないけどしがたないサラリーマンと仲良くなるうなんて人は今の所見かけなかった。

もちろんこつちとしたって願ひ下げだ。ただのアルバイトの学生やらパートの奥さんと親しい仲になったところで一体なにになるのか。ただこう、通勤を一人でして会社にも最初と最後だけいるみたいな生活って人が恋しくなる。

例えば明日、今日見た虹について話を聞いてくるような人が欲しい。でも明日は休みで遊び相手もない。みんな結婚しているし子供もいる。だから独身男の事を毒男なんて呼ぶのだろうか。

ふと僕は忘れた。自分の帰り道の右折する場所を直進してしまっただ。

ついてないなって僕は思い、先に進んだ。こうなると当分右折先はない。左折してUターンするしかないのだけど、それもなんだか面倒くさかった。仕方なく僕は虹のかかる方に進んでみようかと思っただ。

世の中の知らない事を一つ探ってみる。そういう事も多分一つ必要な事かもしれないと思って。

虹の一端に向かって直進していくのはなかなか難しい事だった。道はもちろんまっすぐにつながっている訳じゃないなので橋のない川

に出会うとなかなか面倒で小さな道の連続もなかなか骨の折れる事だった。そうこうしている空がオレンジ色に変わる。

自動販売機が何台か置いてあるスペースでもう引き返すべきなのかもしれないと思いながらコーヒーを飲む。

自分がどこにいるのかも、何をしているのかも判らなかった。馬鹿な自分だわ。そう思っている所にスポーツバイクが通りかかった。逆から右折してくる黒塗りの車。危ないかなーと思っていたら、ゴムの擦れる音が聞こえてバイクが宙を飛んだ。嘘だろう??そう思っていたら車は何事も無かったかのようにタイヤを軋ませ急加速していった。ふと見えた影が光彩に刻み付けられた。夕焼けに反射した運転手の顔が僕からは丸見えだった。

手元から飲み物の缶が落ち、僕は頭のでっぺんからどんと冷たくなつていく感覚があった。とにかくどうにかしないといけない。放り投げられた人に駆け寄る。その人はフルフェイスのヘルメットを被っていた。右腕あたりから血が染み出ている。楽な体勢にして僕は呼びかけるが反応はない。僕はその人のヘルメットを取った。まだ若々しいラフランスのような肌の女性だった。

息が短く口から血を吐いていた。肺に骨が刺さっているかも知れない。

僕はとにかく周りに人がいないかどうか見渡してみるが周りには住宅も無く時折車が過ぎていくだけだった。

心音はどうだろう……。ぶるぶる震えていたのは僕の手だった。くそつたれ。本当に動いてない。どうすればいい。肺に骨が刺さっているとしたら心臓マッサージをしても肺に血が貯まってしまう。何か良い方法はないのか? 駅や学校などAEDが置いてある場所とか近くにないのか?

ふと、僕は自分の車に目が止まった。そうだ。僕は医療品の営業だったんだ。

慌てて車に駆け込み僕は助手席のダッシュボードを開けた。そうだったんだ。僕が薬剤師を目刺し、それが駄目で医薬品の営業とい

う職についたのかすっかり忘れていた。僕は人の役に立ちたい。人を救うために仕事がしたい。ずっとそう思っていたんだ。

車載用のAEDを外すと僕は彼女の胸に付け作動させた。少し時間がかかる。その間になんとか、誰か呼んでこないといけない。

大声で僕は叫んだ。しかし人気のない田舎で車も殆ど通らない。

どうにか、だれか呼ばないと……

僕の目に入ったのは彼女のバイク。僕はその大破したバイクに近づく。汗がでた。強烈な匂いを発しそうな汗だ。

構ってる暇はない。僕はそのバイクの給油キャップを開けて持っていたジツポライターに火を付けた。体勢を伏せてジツポをそのバイクに向かって投げる。

轟音が天を裂くように轟いた。僕は吹き飛ばされて大きな炎の柱が出来上がっていた。

「本当に何をやったか判ってるんですか！あんたのやった事は一つまちがえれば大惨事だったんですよ」

「すみません。でもそうしなきゃならなかったんです。こうでもしなきゃだれも気がついてくれないと思ひまして」

消化されたバイクの前で僕は警察官に言い寄られた。爆発が起ったあと、近くの民家の人が110番。119番をして、自動販売機の前には消防車2台パトカー2台救急車2台が押し寄せた。彼女の心臓は僕が行ったAEDのお蔭で動きだし病院に送られた。

「被害者はどうなつたんですか？どこの病院に運ばれたんですか？」

「君には警察署で詳しく話を聞かせて貰わないとならない」

「病院に連れてして下さい。彼女の安否が心配なんです」

「家族や友人なのかね」

「そうじゃないですけど、僕が警察署に行っているあいだに命をおとしていたなんて事になったら、僕がやったこと何にも意味が無かつたって事になるじゃないですか」

「そんな事はない。適切かどうかはわからないがやるべき事はやつ

た。違うか？ いま手術中だろうし行っても意味が無い」

僕はもうどうする事も出来なかった。パトカーに乗せられるで
犯罪者扱いだった。俯き唇を噛んだ。警察官は無線で言う。

「これより、目撃者と共に病院に向かい病院内で事情を聞く事に
します。どうぞ」

赤いサイレンがなった。僕は驚いてバックミラーに映る運転手を
見た。

「誰かを助けたいそれは警察でも同じだ」

そう警官はいった。窓の外を見ると車は虹の先端に向かって走っ
ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7757i/>

毎日三枚小説『虹』

2010年10月8日15時13分発行